



私たちの震災の体験を伝えます。皆さん、こんにちは。私が渡辺涼子です。隣にいるのは八木沼賢吾です。私たちが今まで実践してきた活動、体験をご紹介します。

私たちは宮城教育大学の学生です。日本における教員養成大学で、2011年、この教育大学の学生は東日本大震災を直接体験しました。この大震災を「災害」と呼びたいと思います。私たちは将来、できるだけ被災地において教師になりたいと思っています。

私は震災後の3年間、学生ボランティアのリーダーとしてボランティアが教育の支援を行い、被災地における学校の復旧のお手伝いをしてきました。こういった被災地において、学生たちが学習を続けることを奨励し、私の友人たちは被災地においていくつかの学校を回り、児童の学習のお世話、支援をしてきました。また、八木沼さんはさまざまな被災地における生活状況を私と一緒に視察してきました。あとで話をしてくれます。

私は現在どういった問題に人々が直面しているのか、子どもたちが私たちに何をしてもらいたいと考えているのか、今、彼らに私たちは何ができるのかを考えることがこの体験を通じて可能となりましたが、2013年3月、私が最初にオーストラリアに行ったとき、英語で私たちの体験を伝えることが十分にできず、大変残念に思いました。

その体験をきっかけとして、『Reminder of 3・11』という英語版の小冊子を編纂することができました。これは外国人向けに私たちの体験を伝えるためのものです。多くの方たちの支援をいただいて、英語と日本語で2013年7月に作成することができ、2013年8月英国に行ったとき、2014年3月にアメリカに行ったときには、これを使って多くの人たちに体験を伝えることができました。

また、フィリピンとの学生の交流、日系アメリカ人との交流を、それぞれ2014年7月、10月に持つことができ、こういった異文化間交流を通じて、『reminder of 3・11』第2版を作成することができました。第2版においては多くの方たちの協力をいただいて、日本語を含め7カ国語で作成をすることができました。私たちが撮った被災地の写真も加わっています。それでは八木沼さんにバトンタッチしたいと思います。

八木沼 ありがとうございます。それでは、学生の福島における体験ツアーについてご紹介したいと思います。

私は福島県南相馬市の出身です。福島県の北東部にある町です。津波と地震によって甚大な被害にあいました。それに加え、私が住んでいる町は原発圏内25キロということで深刻な大きな問題に直面しており、依然として多くの住民が帰宅をすることができずにいます。そして、宮城における津波によって被災した被災地に行く学生はいるものの、誰も住

んでいない、この放射能で汚染された地域に短時間でも学生の人たちが訪問することができないか考えて、福島の学生向けのツアーを企画することにしました。2回にわたって南相馬へのツアーを行い、学生たちを案内することができました。

小高地区は原発 20 キロ圏内にある地区です。今は日中立ち入りが可能になりましたが、夜間はみんなほかの地区に退避しなければいけないことになっています。小高の放射線量はほかの地区に比べて低くなっていますが、毎回 40 人の学生、教師に参加をしてもらうことができました。

中心部、海沿いには線量計が設置されていてご覧のような情景になっています。多くの家々は海岸線沿いで崩壊しています。まだ 20 キロ圏内にあることから、撤去をすることができない倒壊家屋が残っています。多くの参加者は言葉を失い、私に対して感想として「できるだけ多くの人たちにこの物語を伝えたい。そのためには放射能についての正確な情報を伝えたい」と言ってくれました。風評被害があるにも関わらず、私の故郷に来てくれたことを大変ありがたく思っています。

このベンチを見てください。小高の中心部で「がんばっぺ!」「お帰り」と書いてあります。この絵を見ていただいても、小高の住民に対して多くの人たちが応援してくれていることが分かります。大震災から 4 年が経過しましたが、東北に住み、このツアーを計画した若者の一人としてできるだけ多くの人たちに、私たちの体験、教訓をこれからも伝えていきたいと思っています。以上です。ありがとうございました。